

[課題演習報告]

児童の学校適応感を高める係活動  
—児童が自発的、自治的に企画・運営する活動を通して—

澤 山 愛  
Ai SAWAYAMA

福岡教育大学教育学研究科教職実践専攻スクールリーダーシップ開発コース  
学校適応支援リーダープログラム  
宗像市立自由ヶ丘南小学校

(2023年1月10日受理)

本研究は「学級の児童が学級内の仕事を分担処理し、児童の力で学級生活を楽しく豊かにすることをねらいとしている」(小学校学習指導要領解説特別活動編, 以下, 小解説) 係活動に視点を置いている。係活動は教員の指導性が大きい当番活動と混同されることもある。本研究で取り組む係活動は、学級生活の向上のための活動目標の設定や、目標達成のための役割分担を自分たちで行い、係を構成するメンバーと協働して実践する活動である。この係活動を通して、児童は友達と活動目標や目標達成のための方法、役割分担を共有し協働的な活動を体験できる。また、自分の役割を果たし、それを友達から認められることで自己有用感も高まる。本研究では、報告者が担任教師へ係活動の指導内容をコンサルテーションし、係活動による児童一人一人の学校適応感の向上を目指した。その結果、人間関係の深まりや低中高学年の発達段階に応じた学校適応感を高めることができた。

キーワード：係活動, 学校適応感, 自己有用感, 係の企画書, タブレットの活用

## 1 問題と目的

### (1) 主題設定の理由

#### ① 社会の要請から

令和3年中央教育審議会答申「教育課程部会における審議のまとめ」では、「協働的な学び」について「子供同士で協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう必要な資質・能力を育成する『協働的な学び』を充実することが重要である。」と述べられている。また、本研究は「学級の児童が学級内の仕事を分担処理し、児童の力で学級生活を楽しく豊かにすることをねらいとしている」(小解説) 係活動に視点を置いている。係活動は教員個々の経験に基づいて行われることが多く、教員の指導性が大きい当番活動と混同されることもある。本研究で取り組む係活動は学級生活の向上の

ための活動目標の設定や、目標達成のための役割分担を自分たちで行い、係を構成するメンバーと協働して実践する活動である。この係活動を通して、児童は友達と活動目標や目標達成のための方法、役割分担を共有し協働的な活動を体験できる。また、自分の役割を果たし、それを友達から認められることで自己有用感も高まる。文部科学省国立教育政策研究所リーフ18には「自己有用感とは、相手の存在なしには生まれてこない、自己に対する肯定的な評価」と示してあるように、このことが学校適応感を高めることになると考える。

#### ② 在籍校の実態から

本校は児童数261名であり、1学年1学級の学年が2学年、1学年2学級の学年が4学年、特別支援学級は知的学級が1学級、自閉・情緒学級が1学級ある全12学級の中規模校である。在籍校は、隣接する自由ヶ丘中学校と自由ヶ丘小学校の3校で小中一貫教育を推進しており「学びの丘学園」と呼んでいる。本学園の令和4年度の学園教

育目標は「自己教育力と協働的学習力を身に付けた子どもの育成」である。また、本校の重点目標は、「自己教育力と協働学習力を身に付けた子どもの育成」である。本研究で、友達と協力して役割を分担しながら係の活動を企画・運営し、学級の友達に楽しんでもらうことで、自分の居場所や自己有用感を感じたり、全ての児童が相互に影響を与え合っ居場所を感じたりする学級の組織をつくることは、「協働的学習力」を身につけた児童の育成につながると考える。また、児童の学校適応感が高まり、児童一人一人が自分の居場所を感じながら、落ち着いて安心して自分の力を発揮できる環境は、学園の教育目標を具現化することになり意義深いと考える。

## (2) 研究主題の意味

主題に示した「児童の学校適応感を高める係活動」について述べる。まず、「児童の学校適応感を高める」とは、学級や学校に所属する児童が学習面や心理・社会面などの学校生活において、問題なく生活できると児童が感じる程度を高めることである。次に「係活動」とは、学級生活を共に楽しく豊かにするために児童が創意工夫しながら自主的、実践的に取り組むことができる活動である。次に副主題の「児童が自発的に企画・運営する活動を通して」とは、係活動の内容を教師のお手伝い的なものではなく、児童が学級のみんなで楽しむことができる活動を協働して企画・運営するものにするということである。本研究では、係活動に視点を置いて、児童が集団の一員として認められているという満足感や充実感、連帯感などを感じる居心地の良い集団に所属して、活動目標を決め、目標達成に向けて、メンバーと協働して活動することを通して、自己有用感を感じながら、安心して学校生活を送ることができるようにする。まず、所属する係を児童が決める際、担任教師がリーダーシップを発揮しながらどの児童にとっても居心地の良い集団を構成する。次に児童が、学級のみんなで楽しむことができる活動を企画・運営する。学級全員が、その活動を楽しみ、活動を通して学級全体の人間関係の深まりも目指す。そのことで、児童の自己有用感を高め、児童の気持ちを安定させ、また、学級内の人間関係の安定も図り、児童の学校適応感を高めるものである。

## (3) 研究の目的

学校への不適応感がある児童（以下、対象児童）を受け持つ担任教師への係活動のコンサルテーションを通して、係活動と児童の学校適応感との関係を効果検証する。

## 2 研究 I

### (1) 目的

児童が自発的、自治的に進める係活動について効果的な指導のあり方と効果を検証し、係活動と児童の学校適応感との関係を効果検証する。

### (2) 方法

①実施期間 20XX年5月～20XX年12月

調査期間 20XX年10月～20XX年12月

②対象 在籍校5年A組児童29名

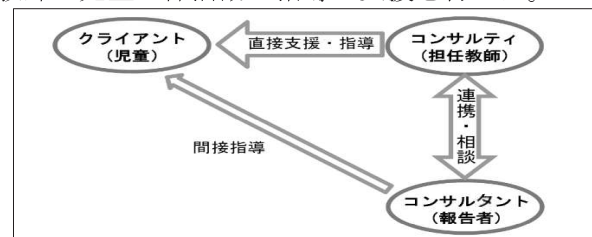
③測定内容と測定方法

「集団生活アンケート」（長谷川ら、2012）を参考にした10項目のアンケートで児童の学校適応感を把握する。また、「2学期にクラスが一番成長したところは何か教えてください。」という自由記述式のアンケートを実施する。また、友人関係や学習面などの学校生活に課題のある児童のうち、4年生時に友達とのトラブルが多く学校を休みがちな時期もあったa児、「友人サポート」と「非侵害的人間関係」の平均値が「要支援領域」であり、早急な支援が必要であったb児を対象児童とし、複数の教師による観察と「6領域学校適応感尺度ASSESS」（以下、ASSESS）の各因子の平均値の変容をもとに児童の変容を客観的に把握する。

### (3) 実践の具体的内容

①報告者の学級への関わりについて

図1は報告者と5年A組学級担任、児童の関係を示したものである。報告者はコンサルタントとして5年A組の係活動のコンサルテーションを学級担任に対して行った。コンサルテーションとは、「異なる専門性をもつ複数の者が、援助対象である問題状況について検討し、よりよい援助の在り方について話し合うプロセスのこと」（石隈、1999）である。報告者が週に1回学級担任に係活動の様子を聞いた。その時に担任教師が話した係活動の指導の悩みに答える形で、係活動の企画書の提案や活動を活性化する工夫についてのアドバイスを行った。報告者からのアドバイスを受けて、担任教師が児童の係活動の指導・支援を行った。



【図1 本研究での報告者と学級担任、学級児童の関係性】

### ②係活動オリエンテーションについて

どのような係を設置するかを決める際には、係

活動オリエンテーションとして、学級会の議題として取り上げた。学級にとって必要のある係を話し合い活動で決定し、全員で役割を分担するなど、自発的、自治的な係活動に取り組めるようにした。表1は5年A組に設置された係の一覧である。このように、児童の創意工夫を十分に活かすことができる係活動の種類となるように支援した。

【表1：5年A組に設置された係】

1学期	2学期
・いろいろ遊び係（遊び係）	・楽しい遊び係（遊び係）
・イベント係（遊び係）	・イベント係（遊び係）
・あべトク係（遊び・お笑い係）	・Asobi係（遊び係）
・ギネス係（記録挑戦係）	・ザ・タブレット係（タブレット係）
・INTERI トリオ係（クイズ・マジック係）	・INTERI デュオ係（クイズ・マジック係）
・ジャジャガリコ係（じゃんけん係）	・じゃんけん・お笑い係
・新聞係	・新聞係

③係のメンバー構成について

脇田(2019)は、「係を構成するメンバーを決める段階で、誰と誰が適切なのか、どの子も生きるメンバー構成はどうあればいいのかなどに注目することはない。」と述べている。どの児童も活躍でき、どの児童にとっても居心地のよいメンバー構成にするためには、教師がリーダーシップを発揮しながら、メンバー構成を行う必要がある。具体的な手順は次のとおりである。

- 1) 学級会で学級に設置したい係を決める。
- 2) 自分のなりたい係を第1希望から第3希望まで希望表に書いて教師に提出する。
- 3) 教師は、集めた希望表を見ながら、日頃の観察に基づいて、一人一人の子どもが生きるようにメンバー構成をする。

一人一人が生きるメンバーを構成する観点は、「どの子とどの子がいつも一緒に遊んでいるか。」「誰とでも仲良くできるのはどの子か。」「あの子を支えるのはどの子か。」などであり、この観点で学級担任が係のメンバーを決めていった。

- 4) 所属する係を発表する。

④係の企画書について

毎週木曜日に、各係の児童がタブレットの企画書に活動の目的や活動内容、役割分担を話し合いながら記入し、同じ係のメンバーや他の係の構成員と共有できるようにした。さらに、企画書は学級担任にも共有し、学級担任はその企画書に対して、内容は適切か、役割が一部の子に偏っていないか、必要な道具は学校内にあるか、また、必要

【表2：児童がこれまで企画・運営してきた係活動の内容】

活動の種類	みんなで遊ぶ活動	みんなに楽しい時間を提供する活動	教室をもっと楽しい空間にする活動	廊下の係コーナーを充実させる活動	ロイロノートを使った活動	タブレットを使った活動
内容	・おにごっこ ・ポッチャ ・けいどろ ・ドッジボール ・逃走中 ・ギネスに挑戦	・コントの披露 ・漫才の披露 ・マジックの披露 ・じゃんけん大会 ・クイズ大会 ・あみだくじ大会	・学級新聞 ・間違い探しポスター ・アンケート結果報告ポスター ・教室の飾りつけ	・紙コップけん玉 ・的あて ・ストロー&折り紙 ・紙ユーフォーキヤッチャー ・折り紙作品展示	・学級新聞 ・間違い探し ・問題この写真は教室のどこにあるでしょう ・占い	・撮影したお笑い動画の披露 ・プログラミング体験 ・タイピング大会

な道具が学級の予算で購入可能かなどについて、支援を行っていった。児童が作成した企画書は、紙に印刷して教室の背面に掲示し、次の活動計画を立てる際に振り返るようにしたり、他の係の児童に次に計画している活動の周知を行ったりした。図2はイベント係が作成した企画書である。



【図2：イベント係の企画書】

イベント係の4名は、タブレットの企画書に「活動の目的」を「みんなの仲が良くなるため」とし、「活動すること」に「ドッジボール」と記入した。次に、必要な準備を話し合い、それをもとに役割分担を決めていった。役割分担をした後は、係活動カレンダーをタブレットで確認しながら、他の係と重ならないように活動する日を記入していった。チーム決めは話し合いの時間内で紙に書きながら考えていた。次の週の木曜日の昼休みに、全員でドッジボールを行った。みんなが楽しめるように、また、委員会活動があっても参加できるように、時間を13時15分から30分までに設定した。

⑤係活動カレンダーの活用について

タブレットで見ることのできる共有ドライブには、全係の活動スケジュールを確認できるようなページを設定し、二つの係が同時に活動するなどのトラブルが起きないようにした。

⑥児童が運営してきた係活動の内容

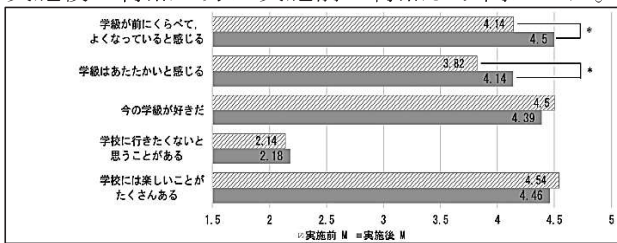
表2は5年A組の児童がこれまで企画・運営してきた係活動の内容である。運動場で「みんなで遊ぶ活動」や、コントや漫才、マジックの披露やじゃんけん大会など「みんなに楽しい時間を提供する活動」が行われてきた。活動を進める中で、運動会の準備等で、みんなが同じ時間に集まって係活動をすることが難しい状況が出てきた。そんな中、児童は廊下に「係活動コーナー」を設置し、

みんなが楽しめる遊び道具を製作して置くようになった。また、児童はタブレットを企画段階だけでなく、みんなで遊ぶ際にも活用した。

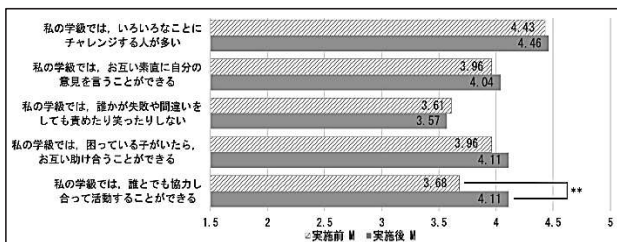
(4) 結果と考察

①「小学校生活に関する調査」アンケートの学級平均の変容から

図4と図5は5年A組の係活動に取り組ませる前と、係活動を本格的に始めた後の学校生活アンケート10項目の学級平均の変容を示したものである。差異を比較するため、対応のあるt検定を行ったところ「学級はあたたかいと感じる」「学級が前に比べてよくなっていると感じる」「わたしの学級では、だれとでも協力し合って活動することができる」という3つの項目において実施前調査得点と実施後調査得点の間に有意な差がみられ、実施後の得点の方が実施前の得点より高かった。



N=28 注1 Max=5, Min=1 注2 \*p<.05  
【図4：5年A組の学級集団の向上に関する項目群の変容】



N=28 注1 Max=5, Min=1 注2 \*\*p<.01  
【図5：5年A組の学級・学校適応に関する項目群の変容】

このことから、5年A組の児童が、学級のみんなが楽しめる活動を係のメンバーで企画し、役割を分担して活動を運営する活動を通して、誰とでも協力し合って活動することがよりできるようになったと考える。また、そのように誰とでも協力できるようになったことで、学級が前に比べてよくなっていると感じたり学級がよりあたたかくなったと感じたりしていることも分かる。

②自由記述式学級活動アンケートから

表3は、5年A組で実施した「2学期にクラスが一番成長したところは何か教えてください。」という自由記述のアンケートを「AIテキストマイニング」(User Local社)を用いて、スコアの高い名詞と動詞の上位5つを調べたものである。スコアとは、その単語の「重要度」を表す値である。一般的な文書ではあまり出現しないが、調査対象の文書だけによく出現する単語は重視し、スコア

が高くなる。

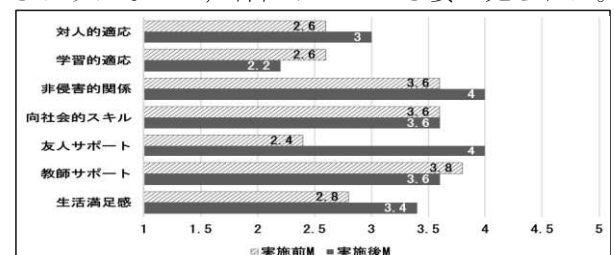
【表3：5年A組の自由記述式アンケートのスコアの結果】

名詞	スコア	動詞	スコア
けんか	20.74	取り組める	1.81
係活動	17.29	近付ける	1.08
体験活動	8.93	さぼる	0.37
運動会	3.38	取り組む	0.28
低学年	1.96	守れる	0.20

一番スコアが高かった名詞は「けんか」であった。文章を見てみると、「けんかが少なくなりみんなが明るくなった。」などすべて肯定的なものであった。次にスコアが高かった名詞は「係活動」であった。「もう来年最上級生になるから委員会や自分たちの係活動を一生懸命頑張っていたところ」などすべて肯定的な記述であった。また、一番スコアが高かった動詞は「取り組める」であった。「勉強に一生懸命取り組めるようになった。」などすべて肯定的な記述であった。次にスコアが高かった動詞は「近付ける」であった。「前は文句を言っていたけど、今では、学級の目標に近付けていて、悪口も少なくなったと思う。」など「学級目標に近付いた」という記述が多くあり、みんなで同じ目標に向かって協働して活動することができるようになってきていることが窺えた。「さぼる」に関して、「委員会や運動会の係を全校のためにさぼらずにできたと思いました。」など、すべて肯定的な記述であり、自分の役割に責任をもてるようになったという成長を感じている様子が窺えた。

③複数の教師による観察と対象児童のASSESSの各因子の平均値の変容から

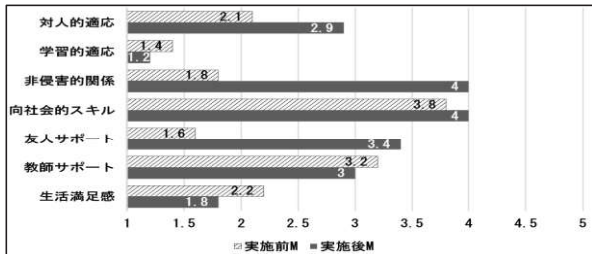
a 児は遊び係として、学級のみんなが楽しめるような活動を懸命に考えていた。運動会準備等で、みんなが集まって活動することが難しい状況が出てきた時に、遊び道具を廊下に設置はじめたのはa児であった。係活動中、同じ係のメンバーと上手くいかないこともあった。しかし、係の活動がはじまると、少しずつ同じ係のメンバーと話をするようになって、仲直りしている姿が見られた。



【図6 a児のASSESSの各因子の平均値の変容】  
図6はa児のASSESSの各因子の平均値の変容を示したものである。「要支援領域」であった「友人サポート」の平均値が上昇した。また、「非侵害的人間関係」の平均値も上昇した。

次に、b児は仲のよい友達と同じ係に所属し、

とても楽しそうに活動していた。みんなの前に出て、大きな声で「じゃんけん大会」の司会をする姿も見られた。また、家でもインターネットで遊びの工作について調べ、懸命につくって、完成した際には担任教師や友達にうれしそうにその道具を見せていた。



【図7 b児のASSESSの各因子の平均値の変容】

図7はb児のASSESSの各因子の平均値の変容を図で示したものである。「友人サポート」の平均値と「非侵害的人間関係」の平均値が上昇した。このことから、b児が周囲との関係を良好であると感じていることがわかる。しかし、b児は「生活満足感」が「要支援領域」のままだった。今後も継続して、b児の学校や家庭、地域での生活が安定するように支援していきたい。

以上のことから、「児童が自発的、自治的に企画・運営する活動」を通して、友人関係や学習面などの学校生活に課題がみられた児童にも学校適応感を高めることができたと考える。今後は研究1の成果を全校に拡充し一般化を図りたいと考える。そのために発達段階に応じた係活動の内容を整理し、実践していく。その際も、係活動が児童の自発的・自治的な活動になる様に担任教師に対するコンサルテーションを丁寧に行い、全校児童の学校適応感を高めていきたい。

### 3 研究Ⅱ

#### (1) 目的

第1研究の結果を踏まえ研究対象を全校へと広め、各学年の発達段階に応じた児童が自発的、自治的に進める係活動について効果的な指導のあり方と効果を検証する。その際、学校への不適応感がある児童（以下、対象児童）を受け持つ担任教師への係活動のコンサルテーションを通して、係活動と児童の学校適応感との関係を効果検証する。

#### (2) 方法

①実施期間 20XX年+1年5月～20XX+1年12月

調査期間 20XX年+1年6月～20XX+1年12月

#### ②対象

在籍校第1学年児童44名、第2学年児童39名、第3学年児童32名、第4学年児童47名、第5学

年児童40名、第6学年児童59名、計261名

#### ③測定内容と測定方法

抽出学級を低・中・高学年から1学級ずつ、計3学級設定し、学校適応感の変容を見取る。さらに、抽出学級から対象児童を1名ずつ選出する。担任教師への実施初期・中期・後期のインタビューを通して、コンサルテーションにより、児童の係活動への支援の様子がどのように変容したかを把握する。児童に対しては、第1研究同様に、「集団生活アンケート」（長谷川ら、2012）を参考にした10項目のアンケートで学級全体の児童の学校適応感を把握する。また、「2学期にクラスが一番成長した（がんばった）ところは何か教えてください。」という自由記述式のアンケートを実施する。また、複数の教師による観察とASSESS（中学年以上）の各因子の平均値の変容をもとにして対象児童の変容を客観的に把握する。

#### (3) 実践の具体的内容

##### ①報告者の学級への関わりについて

報告者は第1研究と同様に、コンサルタントとして係活動のコンサルテーションを学級担任に対して行った。

##### ②係活動オリエンテーションについて

係活動とは「学級の児童が学級内の仕事を分担処理し、児童の力で学級生活を楽しく豊かにすることをねらいとしている。したがって、当番活動と係活動の違いに留意する。」と小解説では述べられている。係活動のオリエンテーションでは児童に係活動と当番活動のちがいを説明した。低学年では、1年生のうちは一人一役になるように当番的な係活動からスタートさせ、責任感や自己有用感の素地をつくり、1年生の2学期くらいから2年生にかけて、徐々に当番活動から係活動へとシフトしていくようにした。

中学年では、「特別活動指導資料 みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）」（以下、特別活動指導資料）を参考に、「児童に休み時間に遊んだ経験や楽しかった事柄などをヒントにして活動を考えさせる。」「教師がこれまで担任した学級の係や自分の経験などを紹介して、活動の視野を広げる。」などして、学級に設置する係の種類を決めさせた。

高学年では、設置したい係プリントを学級児童全員に書かせて、全員分を廊下などに1週間ほど掲示し、「この係はあるといいよね」「〇〇ちゃんと私は提案している係が似ているね」など、児童が自然と話ができるような環境をつくった。その後学級会で設置する係を話し合わせるようにした。

### ③系のメンバー構成について

1学期は教師が昨年度の引継ぎや日頃の観察をもとに系のメンバー構成を決めた。2学期以降は、話し合いの際に児童の思いも聞き取りながら、人間関係が広がっていくようにメンバーを構成していった。どの学年でも、学級の実態に応じて最善の方法を考えながらメンバー構成を行うようにした。

### ④系の企画書について

低学年では、全係活動の内容が当番活動から係活動へとシフトした段階で企画書を作成させるようにした。低学年の企画書は図8のように右側をカレンダーにすることで、児童が準備や本番までの見通しをもちやすいようにした。

かかり

1. かつどうのめあて

2. 今回のかつどう

3. かつどうまえのじゅんび

4. やくわり

名まえ	すること

5. けいかく 11月10日(水)～12月2日(金)まで  
(じゅんぴのこと本ほんのことも書く)

月	火	水	木	金
11月10日	11日	12日	13日	14日
15日	16日	17日	18日	19日
20日	21日	22日 かつどう 準備の日	23日	24日
25日	26日	27日	28日	29日
30日	12月1日	2日		

先生から

【図8 低学年用の系の企画書】

中学年では、企画書は紙に印刷し、系のメンバーで話し合いながら書きこませるようにした。高学年ではタブレットで企画書を作成させた。

### ⑤係活動カレンダーの活用について

低・中学年では、係活動実施の予定をカレンダーに書き込むようにし、高学年では、タブレットで見ることのできる共有ドライブに全系の活動スケジュールを確認できるようなページを設定し、他の系の活動と重ならないように計画を立てながら、見通しをもって活動できるようにした。

### ⑥係活動後について

活動の後には必ず振り返りの時間を設け、次回の活動に生かせるようにした。他の係への賞賛コメントもこの時に送るようにした。また、振り返りは児童任せにせずに、担任教師も積極的に声かけを行うようにした。企画書には他の系の児童や教師からの賞賛のコメントも書いた。

## (4) 結果と考察

### ①担任教師へのインタビューから

2年A組の担任教師は、年度途中である2学期から2年A組を担任している。通常学級は初めて担任する若年層の講師である。実施中期のインタビューでは「2年A組って矢印が散ってあっちこっち行ったりするんですけど『係活動だ！やるぞ！』ってなったときの矢印の向きかたは、みんなシュッとそろおうというか。やっぱり無理にさせるんじ

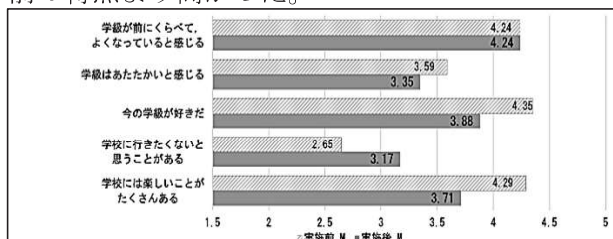
やなくて子供がやりたいって思うものをもってきてあげられたら『ああ、子供たちってこんな力を発揮するんよね』と思いました。」という発言があり、係活動の効果を実感している様子が窺えた。

4年A組の担任教師は、昨年度大学を卒業した新任の教師である。実施後期のインタビューでは「企画書をつくったことでやるのが明確になって、子供たちも動きやすいっていか準備がしやすかったなあと。」という発言があり、企画書を通して児童に適切に支援を行っている様子が窺えた。

6年A組の担任教師は、昨年度研究Iで述べた5年A組を担任していた5年目の教師である。実施中期のインタビューでは、「子供たちにとってはやっぱり係活動の時間がすごく楽しみな時間になったみたいなので。(朝の誕生日系の活動の)優しい雰囲気が始まって、(6時間目の遊び系のドッジボールの)楽しみで終わるみたいなお始めと終わりがそういうふうになっているので、人間関係が特にどうこうっていうのは(問題は)ないです。」という発言があり、係活動が人間関係の向上につながっていることを実感している様子が窺えた。

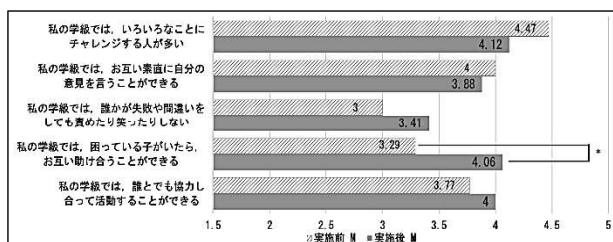
### ②「小学校生活に関する調査」アンケートの学級平均の変容から

図9と図10は2年A組の係活動に取り組ませる前と、係活動を本格的に始めた後の学校生活アンケート10項目の学級平均の変容を示したものである。差異を比較するため、対応のあるt検定を行ったところ「私の学級では、困っている子がいたら、お互い助け合うことができる」という項目において、実施前調査得点と実施後調査得点の間に有意な差がみられ、実施後の得点の方が実施前の得点より高かった。



N=17 注1 Max=5, Min=1

【図9：2年A組の学級集団の向上に関する項目群の変容】



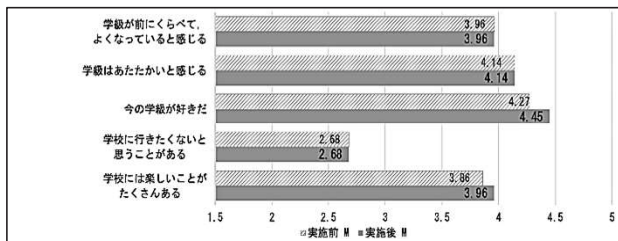
N=28 注1 Max=5, Min=1 注2 \* $p < .05$

【図10：2年A組の学級・学校適応に関する項目群の変容】

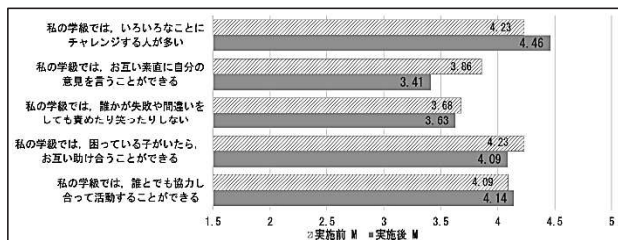
友達と協力して役割を分担しながら系の活動を

企画・運営することを通して「困っている子がいたら、お互いに助け合うことができる」ようになったと児童が実感していることが窺えた。2年A組は1学期から児童の落ち着かない様子がみられ、2学期からの担任の交代もあり、2学期前半はさらに学級全体として、落ち着きがなくなっているような状況もみられた。係活動では2学期からすべて当番活動から係活動へとシフトさせた。初めて企画書を作成し、様々な活動に取り組んでいた。今後も引き続き係活動を通して、児童が学級集団の向上を実感したり、児童の学校適応感を高めたりすることができるように支援をしていきたい。

図11と図12は4年A組の学校生活アンケート10項目の各項目の学級平均の変容を示したものである。係活動に取り組ませる前と、係活動を本格的に始めた後との差異を比較するため、対応のあるt検定を行ったところ有意な差がみられた項目はなかった。



N=22 注1 Max=5, Min=1  
【図11: 4年A組の学級集団の向上に関する項目群の変容】

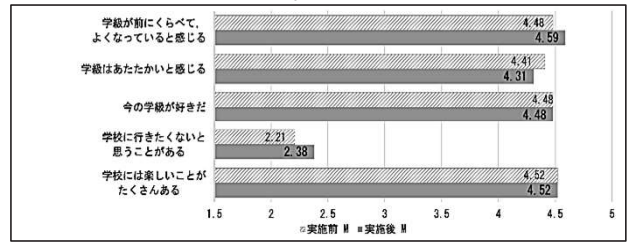


N=22 注1 Max=5, Min=1  
【図12: 4年A組の学級・学校適応に関する項目群の変容】

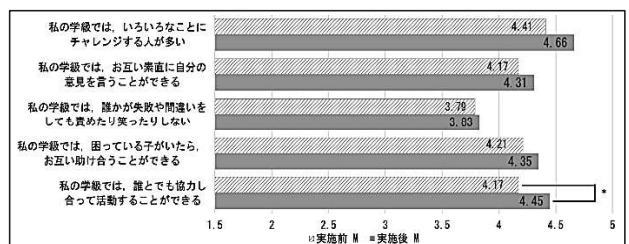
4年A組は2学期に友人関係において大きなトラブルがあったが、各項目に有意に低下する項目はなかった。係活動を通して、今まであまり関わることがなかった児童が、活動の中で楽しく関わり合う様子もみられるようになってきている。今後も継続して児童の関わりが広がるような係活動を行うことができるよう支援していきたい。

図13と図14は6年A組の学校生活アンケート10項目の各項目の学級平均の変容を示したものである。係活動に取り組ませる前と係活動を本格的に始めた後との差異を比較するため、対応のあるt検定を行ったところ「私の学級では、誰とも協力し合って活動することができる」という項目において、実施前調査得点と実施後調査得点の間に有意な差がみられ、実施後の得点の方が実施

前の得点より高かった。



N=29 注1 Max=5, Min=1  
【図13: 6年A組の学級集団の向上に関する項目群の変容】



N=29 注1 Max=5, Min=1 注2 \*p<.05  
【図14: 6年A組の学級・学校適応に関する項目群の変容】

6年A組では、昨年度から継続して係活動にとっても積極的に取り組んでいる。係活動の実施前から、反転項目でないものは、各項目の平均値がとも高かった。その中でも友達と協力して役割を分担しながら係の活動を企画・運営することを通して、「誰とでも協力し合って活動することができる」という実感をもつ児童が多くなったと考える。

### ③自由記述式学級活動アンケートから

表4は、2年A組で実施した「2学期にクラスが一番成長した(がんばった)ところは何か教えてください。」という自由記述のアンケートを「AIテキストマイニング」(User Local社)を用いて、場所の固有名称や人名を除き、スコアの高い名詞と動詞の上位5つを調べたものである。

【表4: 2年A組の自由記述式アンケートのスコアの結果】

名詞	スコア	動詞	スコア
九九	27.38	つるす	16.69
係活動	17.29	つなぐ	3.57
二学期	13.34	とる	0.57
バックヤード	0.76	なぞる	0.55
三学期	0.42	うつす	0.25

2年A組では、2学期は「九九をがんばった」という感想が多かった。2番目にスコアが高かった名詞は「係活動」であり、係活動をがんばったという実感をもつ児童が多いたることが窺えた。

表5は、4年A組で実施した自由記述式アンケートの結果である。

【表5: 4年A組の自由記述式アンケートのスコアの結果】

名詞	スコア	動詞	スコア
あいさつ	82.78	立ち止まる	4.77
節水	13.77	助け合える	3.12
すみずみ	2.74	話し合える	1.92
発表	2.21	できる	1.63
協力	1.85	ゆずり合う	1.39

4年A組では、2学期は「立ち止まりあいさつをがんばった」という感想が多かった。「係を協力してめあてを決めたり話し合ったりできた」「わからないことや困っている時にみんなで助け合えた」

など係活動を通して「協力」「助け合い」ができたという実感をもつ児童が多くいることが窺えた。

表6は、6年A組で実施した「学級活動アンケート」の結果である。

【表6：6年A組の自由記述式アンケートのスコアの結果】

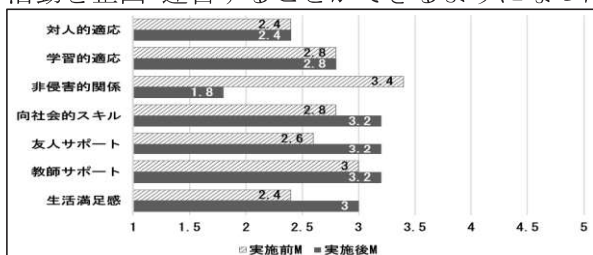
名詞	スコア	動詞	スコア
メリハリ	4.85	取り組める	1.81
チャイム	2.22	深まる	1.20
仲	0.81	思いやる	0.67
責任感	0.76	比べる	0.03
けんか	0.42	守る	0.03

6年A組では、記述内容が広範囲に渡っていたが、「仲が深まった」「責任感をもって取り組めた」「けんかが減った」など係活動の時間を通して、自己や学級の成長を実感している様子が窺えた。

④複数の教師による観察と対象児童のASSESSの各因子の平均値の変容（中学年以上）から

2年A組のc児は、おとなしい児童であり、授業中の発言もあまりない。2学期の終盤には、ロイノートでクイズを作成し、みんなに答えてもらう活動を行っていた。また、友達が出したクイズに対して「生き物豆知識」を披露し、活躍する様子がみられ、本人が自信をもってみんなの前で話すことができるようになってきていることが窺えた。

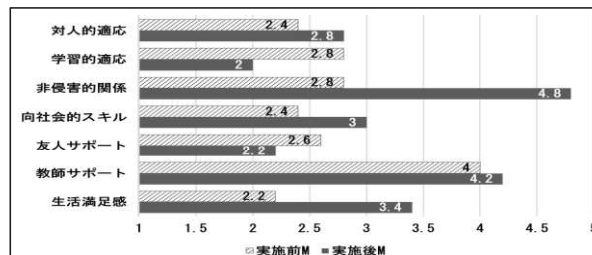
4年A組のd児は、目立つことを好み、自分が話題の中心にはないと感じると不機嫌になるような様子がみられた。1学期は自分たちで係を企画するよりも、他の係の本番での活動に参加して楽しむことを好んでいたが、2学期終盤には友達に楽しんでもらうために係のメンバーと協働して活動を企画・運営することができるようになった。



【図15 d児のASSESSの各因子の平均値の変容】

図15はd児のASSESSの各因子の平均値の変容を示したものである。「向社会的スキル」と「友人サポート」「生活満足感」の平均値が上昇している。しかし、「非侵害的人間関係」が低下し、友達関係を否定的に捉えている様子がみられるので、今後も継続して丁寧に関わっていきたいと考える。

6年A組のe児は、友人関係に関する因子が低く、早急な支援が必要な児童であった。係活動では「室内遊び係」として教室や廊下で楽しい遊び道具を次々と設置し、みんなに楽しんでもらっていた。そのことがe児の自信にもつながった。また、遊び道具を作成する時間が、e児にとって心が落ち着く大切な時間となっていた。



【図16 e児のASSESSの各因子の平均値の変容】

図18はe児のASSESSの各因子の平均値の変容を示したものである。「非侵害的人間関係」の平均値が大きく上昇していることから、e児が周囲との人間関係を肯定的に捉えていることがわかる。

以上のことから、発達段階に応じた係活動の実践を通して低・中・高学年それぞれの発達段階の児童の学校適応感を高めることができたと考える。

#### 4 総合考察

脇田(2019)は「自発的・自治的な活動で学級経営を充実させるといっても、どこまで子供に任せると、子供たちの実態を精緻に見極める教師の観察眼が必要になってくる。」と述べている。担任教師がリーダーシップを発揮しながらどの児童にとっても居心地の良い集団となるよう係のメンバー構成を行うことで、児童が安心して自分の力を発揮できることが明らかとなった。企画書を作成させることで、児童が適切に役割を分担しながら、係活動を行い、本番の活動において学級全員で楽しむことで、学校適応感が高まることが明らかとなった。今後は各発達段階に応じた係活動の在り方をさらに具体化し、発達段階に応じた係活動の在り方をコンテンツにまとめ、広めていきたい。

#### 主な引用・参考文献

- 長谷川祐介・久保田真功・太田佳光・白松賢(2012) 学校臨床学的アプローチによる学級活動測定尺度の開発  
 (1)大分大学教育福祉科学部研究紀要 34(2), 193-206  
 井上 弥・栗原 慎二 (2015)『アセスの使い方・生かし方』ほんの森出版  
 文部科学省国立教育政策研究所(2015)「生徒指導リーフ Leaf.18『自尊感情』?それとも、『自己有用感』?」  
 脇田哲郎(2019) 学級経営の充実資する小学校係活動の研究—居心地の良い集団による遊びを基盤とする活動を通して— 福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻(教職大学院)年報(9), 139-146

#### 謝辞

本研究に際し、機会を提供してくださった福岡県教育委員会及び宗像市教育委員会、また、在籍校の校長先生をはじめ、ご協力していただいた全ての先生方に、心より感謝申し上げます。